

学 位 請 求 論 文 要 旨

語彙知識の広さと深さの両側面から見る
日本語単語暗記アプリの利用効果

2022 年 3 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科
比較文化専攻

方 圓

1. 研究背景と目的

第二言語習得においては、語彙学習が重要である。その重要性に関しては、Wilkins (1972:111) は「文法なしでは、ほとんど何も伝わらない。語彙なしでは、全く何も伝わらない (筆者訳)」と論じている。このため、学習者は語彙学習を重視している。近年、スマートフォン (以下「スマホ」と略記する) の普及につれ、単語暗記カードの使用、単語の書き取りのような紙媒体に依存する学習方法に加え、アプリケーション (以下「アプリ」と略記する) を利用して日本語学習を行う学習者が増加している。「日本語単語暗記」というキーワードで「沪江开心词场」の検索結果を見ると、Android アプリ・ストアにおけるダウンロード数は4000万を超えており、ios アプリ・ストアにおけるコメント数 (ダウンロード数記載なし) は24万以上であることがわかる。このデータから、日本語単語暗記アプリが、中国人日本語学習者に多用されていることが言える。

そこで、本研究では、現在利用されている単語暗記アプリが、語彙知識の広さと深さの、両側面の獲得をどのように、どの程度促進しているか、を明らかにすることを目的とする。また、アプリ分析に当たって、単語暗記アプリが語彙知識の獲得に効果的であるかを評価する枠組みを構築し、今後の単語暗記アプリ製作・アプリ評価の基準ができればと考える。

2. 研究方法

本研究では、まず、語彙知識の広さと深さの2つの側面から、現在利用されている日本語単語暗記アプリにおける単語の提示方法、テスト・練習問題の出題形式を分析・考察した。次に、アンケート調査の方法を用いて、アプリの実際の利用者である中国人日本語学習者を対象に、日本語暗記アプリの利用現状、及び利用後の評価を明らかにした。

アプリ分析の研究対象としては、アプリのダウンロード数が高いものから、「沪江开心词场」、「MOJiTEST」、「Drops」、「词道」を選定した。各アプリを対比し、分析するために、『日本語教育基本語彙一五十音順表』(国立国語研究所, 1984) から、調査対象とする単語を選び出した。語彙知識の広さの側面から行う研究1では、「働く」、「しかし」、「おかしい」、「ネクタイ」の、4つの単語を調査対象に、語彙知識の深さの側面から行う研究2では、「高い」、「引く」、「父」、「たくさん」、「ネクタイ」の、5つの単語を調査対象にした。アプリ分析では、調査対象である単語を通じて、研究対象である4つのアプリにおける単語の提示方法とテスト・練習問題の出題形式を確認した上で、その提示方法と出題形式が、記憶に関する各理論(「二重符号化理論」、「テスト効果」理論及び「転移適切処理」理論) 及び日本語の「語彙知識の枠組み」に適合しているかを分析・考察した。

アンケート調査の調査対象は、中国国内・外の中国人日本語学習者である。研究3であるアンケート調査では、データ分析に用いるサンプルの内訳を実際の中国人日本語学習者の内訳に一致させ、サンプルが中国人日本語学習者を代表できるよう、『海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育機関調査より』(国際交流基金, 2018) の結果を元に回収された563件の回答から、400

件の回答をサンプルとして抽出した。この調査票は、「基本情報」、「利用現状」、「利用評価」の、3つの部分から構成されている。

3. 各章における研究内容及び結果

本研究は8章から構成されている。

第1章は序論であり、本研究の背景と目的を示し、論文の構成を説明するものである。

第2章では、単語暗記アプリに関する先行研究について述べた。従来、日本語学習アプリ（辞書類、聴解類などを含む）に注目した研究はあったが（梁・田口, 2018; 鈴木ほか, 2018, 2019, 2020）、日本語単語暗記アプリに焦点当てて行った研究は未だない。一方、英語単語暗記アプリを対象とした研究については、単語暗記アプリの開発中心に行われており、単語暗記アプリがどの側面に、どのように語彙記憶・学習を促進しているかを考察したアプリ分析の研究（王崢, 2018）はほとんどない。

第3章では、本研究における検討を行う際に援用する各理論を説明し、理論的背景を示した。具体的には、研究1においては、日本語単語暗記アプリにおける語意の提示方法及び出題形式が、語意の記憶に役立つかを検討するために、記憶のメカニズムを明らかにする必要がある。そこで、3.1では、認知心理学における記憶に関する各理論（「二重符号化理論」、「テスト効果」理論及び「転移適切処理」理論）を説明した。3.2では、これらの理論に従い、どのようにアプリを分析・考察するかについて述べた。研究2においては、単語に関する各知識項目が、アプリで学習者にどのように提示され、練習させているかを検討するために、日本語の「語彙知識の枠組み」を構築することが前提となる。その構築の理論的背景として、3.3では、「語彙知識の枠組み」に関する各知見（Richards, 1976; Nation, 1990, 2001; 馬広恵, 2007, 2016）をまとめた。3.4では、これらの知見を基盤とし、日本語の語彙特徴を反映させた日本語の「語彙知識の枠組み」を構築し、そこにける各知識項目を説明した。

第4章から第6章までの議論は、本研究の中心部分である。

第4章では、語彙知識の広さの側面から、日本語単語暗記アプリを分析・考察した。現在の日本語暗記アプリについては、①単語学習のページにおける語意の提示方法は、中国語訳や日本語の解釈・説明のような言語的なものが多く、記憶の「二重符号化理論」に適合していない、②テスト機能のデザイン及び語意に関する出題形式は、それぞれ、「テスト効果」理論と「転移適切処理」理論に適合しており、語意の記憶に役立つという評価を示した。

第5章では、語彙知識の深さの側面から、日本語単語暗記アプリについての分析・考察を行った。まず、アプリを評価するために、日本語の「語彙知識の枠組み」を構築した上で、1つの日本語の単語を理解し、運用するためには、12の語彙知識項目を把握する必要があるとした。次に、日本語の「語彙知識の枠組み」との対照を通じ、以下のことを明らかにした。①「音韻知識項目」、「スペリング知識項目」、「語意知識項目」、「母語知識項目」における中核的な情報については、現在の日本語単語暗記アプリでは十分に提示されており、同時に練習させている。一方、アプリ

には、「形態知識項目」、「コロケーション知識項目」、「構文知識項目」、「語用知識項目」及び「出現頻度知識項目」の提示はあるものの、この5つの知識項目についての練習は存在せず、「文体知識項目」と「語彙ストラテジー知識項目」については、提示・練習ともに存在しない。②アプリにおける単語学習のページが、日本語教科書を元に作成された場合は、そこに記載される情報は教科書の内容だけという限定的なものになるため、各知識項目の提示が不十分になりやすい。③具体的な出題においては、音声ボタンの設置、文完成問題の文章内容、単語の表記方法、選択肢の選定、問題解答のヒントなどについて、様々な問題点が見られた。

第6章では、中国人日本語学習者を対象に、現在の日本語暗記アプリの利用現状、及び利用後の評価について、アンケート調査を行った。日本語暗記アプリの利用現状については、回答者の7割強に日本語単語暗記アプリの利用経歴があることが明らかになった。利用目的としては、単語の暗記だけではなく、単語についての各語彙知識項目（発音や用法など）の学習も挙げられていた。しかし、利用後の評価を見ると、アプリの各機能と提示される学習内容を幅広く活用している約6割の回答者の評価は、「どちらとも言えない」あるいは「少しは役立つ」に集中していた。特に、単語の用法については、7段階評価の点数からも、自由記述の回答からも、現在の日本語単語暗記アプリは、利用者の期待に応えていないことが明らかである。

第7章では、語彙知識の広さと深さの2つの側面から、それぞれアプリ分析とアプリ利用者調査の結果を再整理した上で、総合的な考察を行った。第4章から第6章までで得られた結果のほか、語彙の提示方法と出題形式以外に、単語帳の編成のようなアプリデザインの面においても、学習者のニーズから乖離しないデザインが必要であることを主張した。

第8章では、本研究の意義を述べ、日本語単語暗記アプリの作成・改善に対する示唆を示し、今後の課題を展望した。

4. 本研究の意義

本研究では、現在利用されている日本語単語暗記アプリのメリットとデメリットを明らかにした。この結果については、以下のような意義がある。

まず、今後の日本語単語暗記アプリの改善に向けての方向性を示す。単語暗記アプリの改善には、情報技術の発展だけではなく、語彙記憶・学習の効果を向上させるために、アプリ内容についても、工夫すべきである。本研究では、現在の日本語単語暗記アプリの問題点を明らかにしたことで、今後のアプリ作成・改善へ向けての道筋が見えることが期待される。

次に、本研究では、単語暗記アプリが語彙記憶・学習に効果的であるかについて評価する枠組みを構築した。今後の単語暗記アプリ製作、アプリ評価に当たって、この枠組みを基準にすることができる。

さらに、本研究では、語彙知識の深さの側面から日本語単語暗記アプリを分析・考察する際に、英語の「語彙知識の枠組み」を参考にし、日本語の特徴を考慮した日本語の「語彙知識の枠組み」を構築した。この枠組みにおいて、特に「バリエーション」に対する扱い、及び日本

語の語彙の特徴を考慮した「音韻知識項目」及び「スペリング知識項目」についての説明には、独自性が見られると考えられる。

最後に、本研究で得られた結果は、学習者が日本語単語暗記アプリを選択・利用する上で、役立つと思われる。アプリ・ストアには、多種多様な日本語単語暗記アプリがあるが、紹介文の不十分なものが多いため、学習者は自らの日本語レベル・学習ニーズに合ったアプリを選択しにくい状況がある。また、アプリの選択に関する適切な情報がなければ、現場の日本語教員は、学習者の状況に相応しいアプリを推薦しにくい。従って、本研究は、学習者・教員の両者に、日本語単語暗記アプリの選択・利用を際しての指針を示したものと言えるだろう。

5. 今後の課題

本研究のような日本語単語暗記アプリを対象とした研究では、新しいアプリとその内容、新たな機能に関する分析を逐次、研究の視野には入れられない。これは、本研究の限界点であると言える。

今後の課題として、以下の4つが取り上げたい。

① 単語暗記アプリは、日本語に限らず、他言語においても、様々な開発が行われている。ほかの言語の単語暗記アプリを分析・考察することを通じて、日本語単語暗記アプリの問題点を発見し、改善案を模索することが、今後の課題として残されている。

② 本研究では、主に記憶に関する各理論及び「語彙知識の枠組み」から、日本語単語暗記アプリの機能・内容を分析することによって、アプリの利用効果を考察した。本研究の結果を踏まえた上で、実験によって教育背景・年齢・学習目的が異なる学習者におけるアプリの利用効果を検証する研究や、教育現場での実践によって単語暗記アプリの活用方法を模索する研究などが、今後の課題として期待されている。

③ 単語をグループに分け、タスク・クリアの形式で暗記させる工夫だけではなく、自発的・持続的な単語暗記・単語学習を誘発するため、ゲーミフィケーションを取り入れるアプリ機能の開発と搭載も期待されている。そのための学習内容上の検討、及び機能搭載後の利用効果についての考察は、今後の課題として取り上げたい。

④ 情報技術の発展から単語暗記アプリの研究方向を予測するとしたら、ビッグデータを利用したアプリ機能が日本語単語暗記アプリに搭載された後の、利用効果についての分析・考察を今後の課題として示したい。